

Die Adverbialien als fakultative Ergänzungen unter dem pragmatischen Gesichtspunkt

馬場崎, 聡美
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1517810>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 28, pp.61-71, 2014-10-07. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :



動詞の添加語に関する一考察

— 語用論の観点から —

馬場崎 聡 美

0. はじめに

ドイツ語の依存関係文法における添加語に関して、大きく分けて三つのカテゴリーに属する、時間、場所、様態の副詞の規定に注目して、語用論が主要な方法であることを提示する。その際、統語論はあくまでも二次的な問題である。動詞と文肢の組み合わせは、完全に無制限というわけではなく、むしろ部分的に厳しく制限されているのである。組み合わせが可能となる文肢を探し出す為に、様々な立場から依存関係文法を取り扱う必要があるということは明白である。Helbig¹⁾の意見によれば、依存関係文法をコミュニケーションの方面へ解放する事は、全ての新しい事柄を未だに結合価という見出し語でもって把握する必要があるという意味にはならない。この見解に依拠すれば、語用論の点から見た依存関係文法を、別個の情報伝達のまたは語用論的結合価として弁じる方が、有効である。なぜかと言えば、動詞はある特徴を有する「コンテキストパートナー」Kontextpartnerを支配すると同時に、別種のコンテキストパートナーを除外するからである。

語用論的な観点から、要するに文脈によって必要な副詞の規定と定義するのか、それとも統語論の観点から文の構造上必要不可欠な副詞の規定と定めるのかが問題となる。従って、本論では文脈に依存する配語法とテーマ・レーマ進行という二つの方法を依存関係文法にあてはめて用いる。統語論の領域である配語法と、語用論の領域であるレーマの伝達情報価値（後域の重要度）を動詞の意味に添って、同時に応用すればより明確に添加語、補足成分、任意的補足成分を見分けることができると考える。

1. 問題の見取り図

統語論上の観点から見れば、補足成分を定める際の基準は、副詞の規定を義務的補足成分と添加語のどちらかに振り分けるかである。しかし意味論や語用論の観点からもっと厳密な定義が存在し、副詞の規定を任意的補足的成分と名付ける場合がある。Bußmann²⁾の言説では、様態の副詞がそれに当たる。ここで、語用論を重視する第一の理由とは、状況から推測して、この様態の副詞は話し手の判断や文脈に関係するからである。従って、文脈と照らし合わせながら様態の副詞の位置付けについて分析する必要があると考えるからである。

- (a) 必須の副詞的補足成分 → 方向を表す副詞的規定 Ich fahre in die Schweiz.
 (b) 任意の副詞的補足成分 → 動きを表す動詞+様態の副詞 Jacob läuft schnell.
 (c) 添加語 → 選択制限がない副詞的規定 Caroline weinte im Garten.

(a) の義務的補足成分は必ず動詞と結合し、(b) の範疇に属する副詞的規定は、動詞の意味に応じて補足成分になる可能性がある。(c) の添加語は動詞によって全く支配されない。様態の副詞は、動詞の支配下に置かれるという意見がある一方で、動詞を修飾する文成分という見方もある。私見では、様態の副詞は文全体にかかるわけではなく、行動のありさまを表す動詞のみに関わる。従って、様態の副詞が動詞の支配下に置かれるという論拠を出す為には、状況を踏まえて分析結果を出す語用論は有効である。

語用論を重視する第二の理由として挙げられる言語行動は、haben と sein を用いる現在完了形の作り方である。副詞的規定を挿入するか削除するかによって、移動を表す動詞のアスペクトが変化する現象を考察する時がある。そして、この現象は文脈だけではなく、動詞の意味的結合価と深いつながりを示す。³⁾

- (d) Er ist über den Fluß geschwommen. → 前置詞句が副詞的補足成分となり得る
彼は泳いで川を渡った。(場所の移動)
 (e) Er hat jeden Tag (zwei Stunden) geschwommen. → 選択制限がない副詞的規定
彼は毎日(二時間)泳いだ。(行為そのものを指す=継続・反復)⁴⁾

完了形を作る助動詞には、haben と sein の二種類あるが、(d) の例文では、über den Fluß が全文にかかる副詞的規定であるため、削除可能な添加語だと思われがちである。しかし、この前置詞句を削除すると (e) のように助動詞が haben に代わり、継続や反復のアスペクトの観点から行為そのものを指すということになる。ここで重要なのは、助動詞の選択は、文脈によって操作されることである。従って文脈との関連で、移動を表したい場合、über den Fluß は添加語ではなく、任意的補足成分になる場合がある。これらの例を見てみると、副詞的補足成分と添加語の区別は必ずしも簡単ではない。省略の可能性が信頼できる指標になるとは限らないからである。

そして第三の理由は、場所、時間、様態などの情報を補う副詞的規定にある。心的態度や時・場所・様態を表す添加語が大きな意味を持つコミュニケーション場面では、省いてはならない副詞的規定と必ず出くわす時が見られる。

- (f) Wann reist du ab? いつ出かけますか。
 (g) Morgen früh. 明日の朝です。

結果的に副詞的規定を判断する際に、文の構造(統語論)と文脈(語用論)の二つが検討を要する事項となる。文中の個々の文成分の位置を研究する配語法は、特に定動詞の前後

にある名詞句の位置を指す。ドイツ語の統語論は、情報伝達上の要求によって、文成分を人に訴える力の大きい位置（すなわち文末）の方へ動かせる可能性をうたっているが、他方で文と文を結び合わせて出来上がるテーマ・レーマの関係及び文脈が存在する。文脈は会話の分析を行う上で非常に大切なものだが、ただ聞き手の解釈が正しいかどうかを確認するという意味に止めるべきではない。既知の情報と未知の情報を確認すると共に、先行する文と後続の文のつながりとなる要素の位置なども確認する必要がある。文脈とは、二つの手段によって形成される。すなわち、文法的なつながりによる文脈、例えば、指示的な代名詞を使って作り出される結束構造と、テキスト全体のまとめ、すなわち文と文の間にある意味の成立に関係する結束性がある。副詞的規定の重要性とは、すなわち伝達内容の不明な点を明らかにすると同時に、何を優先的に伝えたいのかを知ることが重要である。ここに語用論を援用する重要性がある。以下さまざまな場合分けをして、これを考察する。まず、一つの文の中にある文成分の配列には先行している文脈が反映される故に、文法上の結束構造と語順を照らし合わせる。そして、次に文脈の内容と意味的関連性を示す結束性、テーマ・レーマ進行について述べる。

2. 「配語法」 *topologische Felder*

2.1. 「話題化」 *Topikalisierung*

話し手が任意に文成分を並べ替えて、文の特定成分を話題化する *Topikalisierung* という置き換え操作がある。会話のトピックや全体的な準準など、重要な所を選択して並べ替える。トピックには主語・目的語・副詞的規定・副文など、どれもなり得る。⁵⁾ 何よりも、話し手がある要素をメッセージの中で強調したければ、それらは文の「前域」 *Vorfeld* に出てくる。しかし、統語論上前域は、後域と比べるとさほど重要ではないとされる場合が少なくない。前域は通例、前出のトピックや意味内容を挿入するために使われる。

ここでは語用論の一観点である「左方転換」 *Linksversetzung* を、新聞の記事を例に検討しよう。本論の分析に使用する幾つかの例文は、ドイツで刊行されている週刊新聞「*Die Zeit*」の中から抜き出し、現代ドイツ語で使われている様々な副詞的規定を取り扱う。

フランケンヴァルトに関する広告に次の様な内容がある。「魔法をかけられた谷、静寂な森、絵にかいたような集落を歩き回り、また道の傍らに生えている森の果物を味わうことができる。」これに続く文は以下の通りである。

(h) Hier genießen die Urlauber Wandererlebnisse der besonderen Art: [...]

ここで休暇旅行者はハイキングを特別な方法で楽しめます。(Europäische Union: *So schön ist der Herbst im Frankenwald*. *Die Zeit*. N° 38. Reisen 12. September 2013, S. 67.)

左方転換は語用論の一つの観点であり、語順または語の場所が問題となる。さらに、左方転換が行われる時は、先出のトピックの完結、新しいトピックの導入、従属しているト

ピックの始まりなども明示する。このため、前域に置かれた hier は、話題の中心となるハイキングの場所を目立たせる副詞的規定として表現されている。

空間副詞である hier が、添加語か補足成分なのかということは、文法的な問題ではなくて、内容や事実と関係している。

内容的に動詞だけの意味では不十分な場合、動詞は補足成分を要求すると考えられる。補足成分となった副詞は動詞の内容を補うことになり、密接に動詞と関係していると考えられる。意味上は動詞の一部のようになっている場合もある。⁶⁾

ハイキングの場合、genießen の意味は食べ物や喜びを味わうというよりも、むしろ自然などの場所を楽しむという意味になるので、目的語ではなく空間副詞 (hier) が動詞の支配を受けると考えられる。

左方転換の定義とは、元来は会話の際にある単語を用いて話題を示し、それに引き続いてその話題の説明をするレーマとなる文の一つ作る。⁷⁾ 後続の文の中で話題を代名詞にして、もう一度取り上げるのが通常の左方転換の作り方である。この様にして、後方の文中にある情報を参照するのである。

Rückverweisender Ausdruck 後方参照指示による表現⁸⁾

(i) In der Stadt – da habe ich gestern ihn getroffen. 町で昨日私は彼と会った。

Referenz トピック Aussage トピックの意味内容

場所を表す副詞的規定 in der Stadt は、後続の文の中で da に書き換えられて、もう一度取り上げられている。統語的結合価の観点から言えば、in der Stadt は削除できる。このトピックは場所を表す副詞的規定で、削除されても文法的に正しい文が残る。(In der Stadt habe ich gestern ihn getroffen. → Ich habe gestern ihn getroffen.) しかし、語用論の観点から見れば、左方へ転換されるものは意味がある成分となり得る。語用論上絶対に必要な文成分は、左方転換によって重要な文成分の範囲内に位置づけることができる。そして、後方の文の中で指示詞 da が取って代わり、強調されている形となる。左方の成分と後続の指示詞の統合の度合いにここで注意すべきであり、場所、時間、様態を表す副詞的規定の場合、上の例のように指示詞になるものほど重要だと思われる。後方の意味内容で状況定位となって現れること、すなわち何が繰り返されて何が繰り返されないかが問題になる。言い換えれば、重要な要素を文から外へ出して、最初にはっきり示す必要があるというわけなので、左方転換を行うことによって注意を引く文成分を一種の補足成分として確定できる。

副詞的規定は、人物・事柄・物の間に成立する時間的または空間的關係を規定し、特に話し手は詳細を述べる必要がある場合に副詞的規定に注意する。とりわけ、時間や約束事などを取り決める際に、副詞的規定が無視できない要素となる。例えば、大学生活で試験前に次のような会話が聞こえてくる。

- (j) Wann beginnt die Klausur? 試験はいつ始まりますか。
 (k) Genau 10 Uhr beginnt es! 10時ちょうどに始まります。

特定の日時に取り決められた試験について述べる時、時間を表す副詞句は見落とすことができない重要な情報である。従って (j) に対する答えの文 (k) に見られる左方転換は、文脈に依存する文の典型的な例の内の一つである。

文脈は必ずしも常に前後にあるとは限らない。通常は、前後関係に依存する文成分 X が、統語的・意味的文脈に挟まれている状態である。⁹⁾ 例えば、文脈を AB で表すとすると、AXB の型に配列されるけれども、場合によっては B もしくは A のどちらか一方が欠ける事さえある。先に述べた左方転換をこの型に当てはめると、明らかに後続の文が文脈となり、左方転換されている文成分 In der Stadt に作用する (XB)。このように文脈の条件は様々に異なる。

2. 2. 「後域」Nachfeld と「第二後域」Nachnachfeld の伝達価値

後域に置かれる副詞の規定が、統語的に動詞に対して密接な関係にあるのかどうかを、ここで考察する。まず、統語論では後域が重視されることを強調したい。「後域」Nachfeld は、そこに最も多くのまたは最重要の情報が含まれているので、別名「中核域」Kernfeld とも呼ばれている。後域は、いわゆる情報伝達における中心部分で、最も重要な構成要素である。

Vorfeld	finites Verb	Nachfeld
Das Mädchen	war	letzte Woche bei uns.

上の図表を使って説明すると、定動詞が軸となって、その周りに二つの意味領域が配列されている。後域に入る要素が毎回、最も重要になるというような単純な問題では無いが、伝達価値に関しては何らかの重要性を示していると考えられる。この構文の後域には、二つの文肢がある (letzte Woche / bei uns)。一つは時を表す副詞で、もう一つは述語内容語である。

時折、後域が二つ出来上がる時がある。この理由は、第一後域が長くなりすぎるため、二つに分けるからである。特に「第二後域」Nachnachfeld は第一の後域と重要性が異なる伝達価値を持っているので、第二後域はしばしば動詞の枠構造の外に配置される。

- (l) Einen kleinen Korb sollten die Wanderer ebenfalls unbedingt dabei haben – für die leckeren Pilze, die im Frankenwald so zahlreich vorhanden sind.

フランケンヴァルトの中にはおいしいキノコがたくさんあるので、ハイカーも同様に必ず小さな籠を一つ持参してください。(Europäische Union: *So schön ist der Herbst im Frankenwald*. Die Zeit. N° 38. Reisen 12. September 2013, S. 67.)

Vorfeld	finites Verb	Nachfeld	Klammer-schließendes Element	Nachnachfeld
Einen kleinen Korb	sollten	die Wanderer ebenfalls unbedingt	dabeihaben	für die leckeren Pilze, die im Frankenwald so zahlreich vorhanden sind.

第二後域に割り当てられる内容は、文成分の並列関係の展開、(文肢構成部などの)同格、副文の挿入などの枠割を担い、動詞の枠外配置はほとんど当たり前になっている。第二後域に入るこれらの要素は、一種の同格として第一後域もしくは前域の文成分を修飾する。¹⁰⁾上の例では、第二後域にある副詞の規定が前域にかかっているので、明らかに前域の重要性を強調している。

しかし、配語法は統語論の域を出ない方法であるので、この方法だけを使って、副詞的规定を動詞の支配下にある文成分だと決定づける事はできない。それ故に、ここから先は文脈に関連性のあるテーマ・レーマ進行と照らし合わせながら、副詞的规定が有する伝達価値を解明する必要がある。

3. 「テーマとレーマの関係」 Thema-Rhema Beziehung

ここで取り扱うテーマ・レーマ進行では、単に伝統的な主語・述語関係の枠外に配置されている文成分(レーマ)が間違いなくコミュニケーションの本質を作る役割を担うことがある。副詞的规定がレーマとなるのであれば、任意的補足成分となる確率はどれ程高いのか調べる必要がある。

(m) Wann war das Mädchen das letzte mal bei uns?

R T

あの少女が最後に私たちのところに来たのはいつですか。

(n) Es war letzte Woche bei uns.

T R T

彼女は先週来ました。

テーマ・レーマの観点から考察すると das Mädchen が話題の中心となる。補足疑問文 Wann war es das letzte mal bei uns? の疑問詞は、文脈においてレーマを決定する役割を果たす。言い換えれば、この疑問詞は更に新たな情報を導く要素である。疑問詞以外の残りの文成分 war das Mädchen das letzte mal bei uns をテーマと見なす。返答 (n) の中で、副詞的规定 letzte Woche はレーマとして新たな情報を紹介しているのである。

(n) の文中では、伝統文法によると文の核心は主語・述語関係 Es war bei uns であるが、それに反して語用論上の伝達価値は状況語 letzte Woche である。

先に述べた後域には、特に前置詞句や副文が頻繁に入り、枠外配置の構造が出来上がる。

後域への枠外配置は、聞き手の関心や注目を集める新たな焦点、レーマとなる。¹¹⁾

- (o) *Langsam ging ich über die Brücke, auch der Fluß roch nach Rauch. [...] Bevor die Brücke aufhörte, wollte ich sehen, ob der Fluß um diese Zeit auf dem Bauch lag oder auf dem Rücken. (Rhema)*

私は橋の上をゆっくりと歩いた。川の水さえも煙の臭いがした。〔中略〕橋がとどえる前に、この時間帯に川の流れが腹這いになっているのかそれとも仰向けになっているのか見たかった。(Müller, Herta: *Herztier*. Frankfurt am Main 2009, S. 194.)

後域に副文 (ob der Fluß ... oder auf dem Rücken.) が挿入され、レーマの役割を果たす。さらに、第二後域 (oder auf dem Rücken) が定動詞の後に入り枠外配置を作り出している。ここで腹這いと仰向けを表す二つの副詞的規定は、主人公の心境を強調する為に必要不可欠であり、意味的に定動詞 *liegen* の支配下にあると考えると良い。また二つの前置詞句は、前域の「川」を修飾して、その様態を示している。¹²⁾

- (p) *Für mich war immer klar, dass ich früh heirate. Einen Mann fürs Leben finden, alles mit ihm teilen, bis der Tod uns scheidet – mit dieser Vorstellung bin ich groß geworden. 若いうちに結婚する事は、私にとっては常に明瞭だった。一生涯の結婚相手を見つけて、死が二人を分かたずまで全てを彼と共有すること。私はこの想像と共に育った。(Heimbach, Ariane: *Sie hat ihre Hochzeit abgesagt*. Chrismon. Das evangelische Magazin 01. 2014, S. 54.)*

(p) の例では、接続詞 *bis* によって導かれる「添加語文」*Angabesatz* がある。ここでは、時間を表す副詞的規定が副文となって現れていると考える。主文には継続・反復を示す内容が含まれており、*bis* が導く副文は出来事の終了時点がいつなのかを伝える。¹³⁾ ことでの話題「結婚」は、一時的な事柄ではないという強調がもちろん必要である。制約の際に決まって出て来る決まり文句であり、一種のレーマに見える。

レーマの方に情報量が多く、この様に文末に移動させることを「右方転換」*Rechtsversetzung* と呼ぶ。右方転換とは、純粹に聞き手の関心を引く為のいわゆる補足である。次に語用論では、なぜレーマがテーマよりも重要な位置にあるのかについて論ずる。

4. レーマの「情報伝達動態」*kommunikative Dynamik*

個々の文肢の伝達価値の度合いについてここで言及することにしよう。ほとんどの文の中には、伝達価値の異なった段階が存在する。とりわけ、テーマは最も伝達価値の低い要素として取り扱われており、それとは反対にレーマは最も伝達価値の高いものとされている。

Firbas¹⁴⁾ と Lötscher¹⁵⁾ は、原則的に文を二分割にして、テーマ・レーマ進行を作る方が望

ましいいと主張する。両者は情報伝達動態という言葉を用いて、個々の文肢に含まれている伝達価値の度合いについて書き記している。本論では両者の手段を土台として、書き換えテストとしての補足疑問文を作り、レーマの中に入る副詞的規定の機能を決定する事に取り組む。長い文章の中でレーマをテーマから分けていっそう精密に規定する際に、補足疑問文を作り、その間に対する答えがレーマとなる。もちろん、残りの文成分は全てテーマとなる。

例えば、例文 (b) *Jacob läuft schnell.* で補足疑問文を作るとすれば、様態の副詞 *schnell* がレーマとなり、動詞と連結して新たな情報を与える。残りの主語と動詞がテーマとなる。

(q) *Wie läuft Jacob? – Schnell.*

(r) *Wie liegt der Fluß – Auf dem Bauch (oder auf dem Rücken).*

そして (r) の補足疑問文を作ると、やはり「腹這い」と「仰向け」の副詞的規定は窮地に陥っている状況を説明する為に、欠かせない様態の副詞だという事が分かる。主人公は、貧しさゆえに頭が混乱して「川」がおかしな光景として見えるのである。

補足疑問文のテストに関して言及しておかなければならないがある。¹⁶⁾ 動詞と適合する疑問詞が無いので、補足疑問文で動詞を直接問いたたず事ができない。しかし、*Wie läuft Jacob?* に対して、*Er läuft schnell. / Er läuft langsam. / Er läuft schwankend.* のように、副詞的規定を使って、*laufen* を細かく定義することはできる。このようにして動詞を考察すれば、副詞的規定がもともと動詞の一部であるという見解は間違いではない。

テーマ・レーマ進行とこの配語法の序列が完全に一致するわけではない。しかし、人が意図を持ってパートナーと会話を交わす相互作用の中では、文脈を把握しなければならない。言語の分析とは、シンボル（記号）を用いる言語コミュニケーションによって解釈しあうことに関係があり、ただ文肢の並列というふうに簡単に片づけてしまえば、メッセージの意味を分析できない場合がありうる。

5. おわりに

言語の使い方に関する規則を明らかにする語用論¹⁷⁾の定義にはさまざまある。例えば語用論の起源を記号論や意味論と結びつける考え方などもある。大まかに言えば、語用論は言語学と伝達理論が部分的に重なり合うところに位置し、¹⁸⁾ 言葉の現象に関する興味を言語学と結びつける。それと同時に、行為に関する興味を伝達理論に結びつけるのである。Kortmann¹⁹⁾の主張によると、新しい研究法の中でコミュニケーションの相互作用に焦点を当て、さらに厳密な定義が導かれた。語用論は意味論を補足する副分野であり、日常の中で暗示されている意図を読み取ることを目的とする。

「語用論」Pragmatikの語根（ギリシャ語源 *pragma*）は「事実」、「ことがら」という内容の他に「行い」、「実行」などの意味を持つ。²⁰⁾ 日常生活に関して言えば、記号をどのよう

にして使用するか、そして現実の事柄に即した用い方である。

私見によれば、特に副詞的規定とレーマの関係をどう整理しているかが問題であり、もちろん伝達意図なしでは論述が不可能である。語用論の肝要とは、なによりも文脈に依存する条件を探し出すことである。ある特定の表現がいつ必要になるか、または文脈に反映されているものが発話にどのように影響を及ぼすかである。文脈とは、コミュニケーション場面において体系的に言葉の意味を左右する役割を担う。それと同時に、話し手と聞き手の理解力、すなわち両者の頭の中での解釈にも作用する。これとは別に、文脈と状況は互いに関係づけることができる。この状況という言葉は、一言では定義づけることができない。狭義では、状況は発話場面に関する場所、時間、行為の連関などである。広義では、個々人の興味、知識、知識のやり取りから物事を社会的（文化的）背景による位置づけなどにまで至る。

このように基準を設定するとすれば、やはり時の副詞、場所の副詞、様態の副詞などが明らかに無視できない。もし無視してしまえば、コミュニケーション上の意味が理解されないという問題が持ち上がるばかりではなく、メッセージ自体が拒否されてしまうということになりかねない。従って状況・方向・場所・時などの様々な副詞的規定が、いつそしてどのような理由で動詞や名詞的核に依存しているのかについて、熟考を重ねる必要がある。

注

- 1) Vgl. Helbig, Gerhard: Probleme der Valenz- und Kasustheorie. Tübingen 1992, S. 70.
- 2) Bußmann, Hadumod: Lexikon der Sprachwissenschaft. 4. Aufl. Stuttgart 2008, S. 8f. s.v. "Adverbial".
- 3) Gallmann, Peter: Der Satz. In: Matthias Wermke / Kathrin Kunkel-Razum / Werner Scholze-Stubenrecht (Hg.): Duden. Die Grammatik. 8. Aufl. Band 4. Mannheim / Zürich 2009, S. 782.
- 4) このことは、fliegen, reiten, rudern, segeln, tanzen, flattern, paddeln, poltern, ratternなど行為及び移動をも表す動詞の多くに共通の現象である。国松孝二（編）『独和大辞典』第二版、小学館、2011年、2080頁。
- 5) Fiehler, Reinhard: Gesprochene Sprache. In: Matthias Wermke / Kathrin Kunkel-Razum / Werner Scholze-Stubenrecht (Hg.): Duden. Die Grammatik. 8. Aufl. Band 4. Mannheim / Zürich 2009, S. 1198ff.
- 6) 猪口靖『副詞』、東京大学書材、2000年、25頁。
- 7) Schwitalla, Johannes: Gesprochenes Deutsch. Eine Einführung. 4. Aufl. Berlin 2012, S. 110.
- 8) Fiehler, Reinhard (2009) S. 1198.
- 9) 左右の影響が反映されない文はドイツ語には存在しない。AB両方の脈絡が欠けて空位を示す事は無く、遊離している状態の文が見られる事は無い。Bußmann,

- Hadumod (2008) S. 368f., s.v. “Kontextabhängige Regel”.
- 10) Gallmann, Peter (2009) S. 887.
 - 11) A. Fritz, Thomas: Der Text. In: Matthias Wermke / Kathrin Kunkel-Razum / Werner Scholze-Stubenrecht (Hg.): Duden. Die Grammatik. 8. Aufl. Band 4. Mannheim / Zürich 2009, S. 1126.
 - 12) Müllerの文学作品には、比喩的な言い方が独特の描写として幾度も見られる。主人公の視点では、川が腹這いと仰向けのイメージとして捉えられ、自然の中に自然ではないことを見ようとしている。つまり、頭の中の混乱を示しており、主人公としては現実と非現実の境目にある。
 - 13) 村上重子(著)『接続詞』、東京大学書材、2003年、134頁。
 - 14) Vgl. Firbas, Jan: On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis. Prague 1964, S. 267-280.
 - 15) Lötscher, Andreas: Satzakzent und Funktionale Satzperspektive im Deutschen. Tübingen 1983, S. 63f.
 - 16) Ebd., S. 66.
 - 17) 語用論は元来、学者が言語学の領域に組み入れなかった理論である。語用論はコンテキストにおける意味の研究だと定義される。「論法」formal logicの原理を自然言語に応用して、厳密な検討を重ねるというやり方である。この方法は哲学の一分野から展開した。Kortmann, Bernd: English Linguistics: Essentials. Anglistik / Amerikanistik. Berlin 2005, S. 230.
 - 18) Linke, Angelika / Nussbaumer, Markus / Portmann, Paul R.: Studienbuch Linguistik. 5. Aufl. Tübingen. 2004, S. 201.
 - 19) Kortmann (2005) S. 230.
 - 20) Linke / Nussbaumer / Portmann (2004) S. 194.

Die Adverbialien als fakultative Ergänzungen unter dem pragmatischen Gesichtspunkt

Satomi BABASAKI

Ich habe die Adverbialien (die Adverbialangaben) untersucht, um die Wichtigkeit des pragmatischen Gesichtspunkts bei der Valenzanalyse zu finden. Valenz soll nicht nur syntaktisch betrachtet werden. Die Temporal-, Lokal- und Modaladverbialien können manchmal je nach Situation zu den beachtenswerten Elementen werden, die die meisten oder wichtigen Informationen enthalten.

Syntaktisch betrachtet, teilt man die Adverbialien in zwei Kategorien ein, also entweder als Ergänzung oder als Angabe. Aber streng genommen gibt es unter den Adverbialien noch eine weitere Kategorie. Sie können als fakultative Ergänzung verwendet werden; das heißt, diese fakultative Ergänzung weist auf Modaladverbialien hin. Die Modaladverbialien werden vom Verbalkern verlangt, zugleich modifizieren sie das Prädikat. Zum Beispiel enthält der folgende Satz „Er läuft schnell.“ die Modaladverbiale „schnell“, die als eine fakultative Ergänzung betrachtet wird.

Außerdem ist es bei der pragmatischen Analyse wichtig, den Kontext mit einzubeziehen. Das Problem ist hier die Unterscheidung zwischen Thema und Rhema. Ebenfalls haben Satzglieder unterschiedliche Mitteilungswerte. Das Thema ist das Element, das den niedrigsten Mitteilungswert in einem Satz hat, und das Rhema ist das Element mit dem höchsten Mitteilungswert. Die Entwicklung dieser Konzeption nennt sich kommunikative Dynamik. Um das Rhema und das Thema in einem Satz auseinanderzuhalten, verwendet man eine Ergänzungsfrage, und damit bestimmt man das Rhema; z.B. „Wie läuft er?“ „Schnell.“ Hier handelt es sich beispielsweise um eine Modaladverbiale: „Schnell“ ist eine fakultative Ergänzung im Bereich des Rhemas, die man nicht weglassen kann.

Wendet man zusätzlich auch die Topologie auf die Analyse eines Satzes an, sieht man, dass das Nachfeld die wichtigste Information enthält. Dagegen ist das Vorfeld vor dem finiten Verb von relativ geringer Bedeutung. Im Vorfeld stehen im Wesentlichen das vorangegangene Gesprächsthema und der Inhalt, der zuvor in der Unterhaltung vorgekommen ist. Bei genauer Betrachtung stellt man also fest, dass das Adverbiale im Nachfeld auf die Abhängigkeit vom Verbalkern verweisen kann.

Ich halte es für wichtig, nicht nur die syntaktische Sprachstruktur, sondern auch den Einfluss des Kontextes bei der Analyse mit zu berücksichtigen. Die verschiedenen Mitteilungswerte in einem Satz hängen vom Kontext ab, und manchmal ist eine Adverbiale im Verbalkern (oder Nominal kern) vorangelegt.

Die Satzexemplare entstammen der Gegenwartssprache, und sie beziehen sich auf das Alltagsleben in Deutschland.